



付 26 話 ドイツの学会に出席する No.2

前回の続きで、国際シンポジウムに出かけた際のお話しをする。マルセイユに到着し、全員集合、翌朝、M 先生一行は早くも出立。絵葉書にはそのように記す。しかし、先生に会った記憶がない。どこを如何に旅しているのか全く分からない。謎である。ここでも、マルセイユの観光記憶はほとんどないが、建築家の端くれ、コルビュジェの集合住宅：ユニテ・ダビタシオンを見に行ったことは記憶している。その斬新さに圧倒される。また夜行でバルセロナに向う。国境を越えるとき、列車は停止、何やら作業が始まる。聞くと、当時フランスとスペインでは、鉄道の軌道巾が異なるため調整作業をしているとのこと。誠に大変である。

現在ユーロ圏であれば、国境は自由往来であるが、当時は国境審査があり、通貨も変わる。それでも西ヨーロッパは旅行し易い。バックパッカーや旅行者も数多く見かけた。夜行で国境を越える場合が多く、列車はコンパートメントで、席を引くとフラットになる。国境を越えるとき、検査官によるパスポートチェックで起こされるが、イミグレーション用の書類を書いたこともなく、荷物検査もない。至極簡単である。朝、駅に着くと、まずキャリーバックを駅の荷物預かりに、洗面などの身支度した後、街の情報を得るためにインフォメーションに行く。観光マップなどを手に入れ、ホテルの予約をお願いする。国境を超えたときは出入国間の通貨交換を行う。所要を全て終え、さあ、元気に出かけるぞー。

バルセロナでは、I 氏一行とガウディの建築；サクラダ・ファミリア、グエル公園、カサ・ミラなどを見た。多くの建築家はサクラダ・ファミリアが素晴らしいというが、私にはその意味が分からない。シェル屋としては、美の原点は構造的機能美、つまりシンプルにあると思う。教会は丹下健三の東京カテドラルが好きだ。キャンデラのソチミルコのレストラン、サーリネンのケネディ空港 TWA ターミナル、トロハのマドリッド競馬場などなど。無論、美意識は個人で異なり、教育環境や経験などで様々に変化する。それだから面白い。バルセロナの散歩中に妙なことに気付く。昼頃、百貨店が営業を休止する。聞くと家に帰り昼食、その後昼寝をする。国民性とはいえ、のんびりしていて実に愉快である。

バルセロナの後は、パリに向かう。またもや夜行。I 氏一行はマドリッドに行くという。先に列車に乗り、見送られる。パリに着くと、予約したホテルに直行する。英語が通じず苦労したが、何とかチェックイン。部屋に入ると少し朝寝。昼頃から、パリの街を散策。エッフェル塔、凱

旋門、ルーブル美術館、その他歩いて回れる観光地は全て行ったようだ。ただ、あまり覚えていない。シャンゼリゼ通りの脇の通りに高級ブティック街があり、日本の若い女性が大挙して押し寄せていた。無論、興味は全くないのでスルー。ラーメンを食べたのを覚えている。

翌朝、I 氏一行がホテルに着く。気落ちした様子。聞くと列車に乗る前、少し散歩したそうだ。そこで、カバンの底を切られ、財布を取られたとのこと。パスポートは取られず済んだが、現金を全て失い、意気消沈。警察の事情聴取や何かで一日をつぶし、マドリッドに行けず、直接パリに来たという。慰める言葉もない。悔やんでいても仕方がないので、皆で観光に行く。ソフトクリームをなめながらセヌ川沿いを散歩、ノートルダム大聖堂を見る。昨日食べたラーメンをご馳走、少しは元気が出たようだ。各地の観光施設を見学した後、ホテルに帰る。I 氏はフロントと交渉をしている。席の予約を頼み込む。ムーランルージュだと思うが定かでない。夜、二人で出かけた。そのタフさ加減に感嘆する。

翌日、パリからケルンに向う。フランス側では、クーリングタワーが林立している。日本の原子力発電所は海岸にあり、内陸にあるフランスではクーリングタワーが必要となる。ケルンに到着後、予約のホテルにチェックイン、全員が合流した。翌日、列車でボーフムにあるルール大学に行く。M 先生は既に到着していた。学会には三日間いたと思う。実は記憶にない。ただ覚えているのは、遠くからの論文参加者に旅費が出るという。確か5万円前後。その金で、I 氏一行に晩飯をご馳走した。

西ドイツのどこから出立したか覚えていないが、やはりパキスタンエアラインで帰国する。飛行機の中で、ホテルは予約されてないと M 先生はいう。真夜中到着なのに大丈夫か。またも不安がよぎる。M 先生、客室乗務員と交渉、戻るとホテルが確保できたという。慣れているとはいえ、その交渉術と活動力には改めて恐れ入る。私には到底まねできない。空港に到着し、外に出ると大勢の子供が駆け寄り、荷物運びをせがむ。チップを稼ぐために真夜中まで空港前広場でうずくまり待っている。空港内で見た同国の煌びやかな子供と比較すると暗澹たる気持ちになる。真夜中ホテルに着き、翌日新旧のイスラマバードをタクシーで見て回る。前者は人工都市、整備されてきれいだが何か機械的な様子。後者は煩雑できれいではないが活気がある。金装飾に携わる人が多数見られ、その多くは生涯軒下で暮らすという。翌日成田へ出発、帰国の途に着く。

名古屋駅に着くと、妻と3才の娘が出迎えてくれた。抱き上げようとすると泣かれた。どうやら顔を忘れたようだ。3週間近く留守にしたのだから仕方がない。スキンシップを最初から始めよう。